情態副詞「セイセイト（清々ト）」の発生

―抄物における「X字（原漢文）⇒XXト・ニ（抄文）」という表現法を通じて―

劉　　玲

キーワード：抄物、漢語出自、原漢文の語句との関わり方、X字（原漢文）⇒ＸＸト・ニ（抄文）

要　旨

現代語では「気分がせいせい（清々）（と）した」のように「気分が晴れやかにさっぱりするさま」の意味で使われるセイセイトは、中国文献の《清々》と意味上大きく相違するため、漢語出自のものとは認められず、抄物における「X字（原漢文）⇒ＸＸト・ニ（抄文）」（原漢文のX字をＸＸト・ニ畳語型にして抄文に組み込む）という表現法による創作、すなわち原漢文の「清」字を畳語型「清々」にしてさらに字音読みにしてつくりだされた可能性がある。

はじめに

ＸＸト・ニ畳語型の漢語情態副詞（ト・ニを伴わない場合もある）の中には、漢語出自[1]つまりもともと中国文献にあったＸＸが、漢語として日本語に受け入れられたものが少なくない。例えば、「悠々（ト）」や「濛々・朦々（ト）」のように、はやく奈良・平安期の漢文資料を通して伝来し、次第に日本語に定着してきた一群である（劉〈2000〉、〈2001〉を参照されたい）。一方、字づらの上で中国文献のＸＸに一致しても、必ずしも漢語出自とは認められないものもある。本稿でとりあげるセイセイトはその一例であると考えている（以下語そのものを指す場合セイセイトと記す）。

現代語において、セイセイトは一般に｛心に何のわだかまりもなく晴れやかにさっぱりするさま｝という意味（以下これを「心のさま」と略すことがある）で使われている。最近刊行の辞書を含め、次のような例[2]がある。

(1)　せいせい（清々）ト ス自（不快なことが去って）気分が晴れやかにさっぱりするさま」［西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編『岩波国語辞典』2000年第6版］

(2)　うるさいのがいなくなってせいせいした。［赤川次郎・女社長に乾杯！］

(3)　（略）手紙の件は良い方に解決したし、机の中にタイプしたまま置いてあった応募書類も送ってしまったので肩の荷が軽くなったようで、やや清々した。［藤原正

彦・若き数学者のアメリカ]

このセイセイトは室町期の抄物に現れはじめたものである。当時、(2)(3)におけるようなサ変動詞の用法は未発達で、一般に次の(4)(5)に挙げるように副詞として使われている。

(4)　今日ハ大酒ヲ飲ダガ、夕方汀ヘ出テ漱タレバ、心ガ清々トシタ。[杜詩抄十一][3]

(5)　(略) アシタ早ニハ、世界モ一夜ノアイタニ、天地ノ気モ濁リ、水モユリシツムレバ、スミキル物也、ソノ如ク天地ノ気モ、一夜ヤスメハ、夜アケニハドツコモセイセイト(5-1)アルソ。人ノ気モ、昼ハ一日色々ノコトヲ案シワヅラウホトニ、ニゴリ乱ヲ、一夜ヨイカラトツクトネタレハ、夜ノアイタニユリシツメテスンデ、ハイヲキニハセイセイト(5-2)アルソ。[詩学大成抄七 14 オ～ウ] 清晨向小園

〈※以下必要な場合 [　] 後に原漢文を記す〉

その際、セイセイトは、「汀ヘ出テ漱タレバ」酒酔いからさめてさっぱりしたさま(4)とか、「人ノ気」が「夜ノアイタニユリシツメテスンデ」すがすがしいさま (5-2) とかというように現代語における「心のさま」を表す以外に、{事物のすがすがしいさま、きわめて清らかなさま} という意味（以下これを「物のさま」と略すことがある）ももつ。上記(5-1)のように、「天地ノ気」が「一夜ヤスメ」た後の濁ることなく清らかな状態を表すといったような場合である。時代が降るにつれて、セイセイトのもつ意味の中心が次第に「心のさま」のほうへ変化したため、現代語に至っては一般に「心のさま」だけとなったわけである。

セイセイトにおける意味変化の過程[4]については別稿で論じる予定であるが、本稿ではこの語の発生（どのように使われだしたか）について考えてみる。

辞書類を見ると、セイセイトが漢語出自、つまり「清々ト」と書かれる漢語ではないかと思わせる記述が見える。例えば、山田美妙著『日本大辭書』(明治 26 年）には「せい・せい副　漢語（清々）サツパリシタ體ノ形容」のように「漢語」[5]と記されており、『日本国語大辞典』[6]（初版・二版）には文選の「清々泠々　愈病析酲」(後掲 (17)) が挙げてある（当辞書「編集方針」によれば「漢語やことわざなどについては、中国の文献をも用いる」という)。ただ一方、管見の限り、室町期の抄物以前においてはセイセイトを確認できず (資料 2 に掲げた奈良・平安期の漢文及び和文、鎌倉・室町期の軍記物語や説話集などの和漢混淆文)、古辞書（資料 3）にも載録されていないという実態から、この語は抄物において発生したのだとひとまず判断できる。セイセイトが漢語出自かどうかを明らかにするには、中国文献における《清々》と意味上どう関係するかを明らかにする必要がある（以下中国文献のそれを指す場合には《清々》と記す)。

以下の論述で、抄物におけるセイセイト（1 節）と中国文献の《清々》(2 節 2-1) とは、意味上大きく相違していることを明らかにし、セイセイトは漢語出自という可能性を認めにくく (2 節 2-2)、むしろ、抄物においてセイセイトは原漢文の「清」字に対応して使われることから、セイセイトは原漢文の「清」字を畳語型「清々」にしてさらに字音読みにしてつくりだされたという可能性を指摘する (3 節)。

1　抄物におけるセイセイト

まず、抄物のセイセイトはどのような意味で使われているかを確認しておこう。

抄物を調査する際用いた資料は、以下の15点である（使用テキストは資料1に記す）。

論語聞書・論語私抄・荘子抄・蒙求抄・毛詩抄・長恨歌抄〈以上博士家関係〉・史記桃源抄・杜詩続翠抄・漢書列傳竺桃抄・山谷抄・三体詩幻雲抄・三体詩素隠抄・中興禅林風月集抄・玉塵抄・詩学大成抄〈以上五山僧関係〉。

【表1】抄物におけるセイセイトの使用状況（※空欄は例0を示す。以下同様）

	物のさま (9)					心のさま (4)
	川・水	風景	そら	空気	花・葉	
杜詩続翠抄(1441)						1清々
中興禅林風月集抄(1560)	1	2				
玉塵抄(1563)	1		1清々			2
詩学大成抄(1570)		1清々	1	1	1	1
cf. 杜詩抄(1537以前)						清々
cf. 五家正宗賛抄(1605以前)						清々

（表中の数字は全巻調査した場合の用例数。なお漢字書きはそれを明示し、仮名書きは用例数のみを示す）

以上の15点の抄物から、「心のさま」では4例と「物のさま」では9例確認できた（表1参照）（各抄物の仮名抄と漢字仮名交じり抄の部分を扱い、抄者による漢文抄の部分を対象外にした）。

そのうち、「心のさま」すなわち｛心に何のわだかまりもなく晴れやかにさっぱりするさま｝の意味としては、杜詩続翠抄、玉塵抄に見える。次の(6)「心形」がすがすがしいさま、(7)「胸中キヨウ」ある状態、(8)「心ノ酒ニヨウタヤウナヲサマイテ」さっぱりした様子などである。

(6)　心形清々トナルヘシ也。［杜詩続翠抄十一29オ］高枕形神清（集千家註批点杜工部詩集・巻十一15右・太子張舎人遺織成褥段）

(7)　アソウテ風ニ吟シ、月ヲ弄シテ、胸中キヨウセイ〳〵トシタソ。（略）山谷カ茂叔ヲホメテ、胸中洒落人品甚高如光風霽月ト云タソ。［玉塵抄巻三十七(8-70ペ)］

(8)　山中ノ驛亭ノアル所ニ泉アルカ、此ヲノメハ、心ノ酒ニヨウタヤウナヲサマイテセイ〳〵トシタヤウナソ。又、山路ヲトヲウアルイテクタヒレテ、酒ニヨウタヤウニモウ〳〵トシタニ、驛ニヤスンテクタヒレヲナヲイタハ、［同・巻三十九（8-308ペ）］韻府群玉巻之十「泉　醒心泉」／火雲揮汗日　山驛醒心泉（集千家註批点杜工部詩集・巻八22左・送梓州李使君之任）

ほかに、同じような例は『時代別国語大辞典（室町篇）』によれば、前掲(4)と次の(9)が見られる。

(9)　大悟シテ、煩悩妄想ヲウチハラツテ、清々タル如クナゾ［五家正宗賛抄四］[7]

「物のさま」すなわち｛事物のすがすがしいさま、きわめて清らかなさま｝の意味としては、中興禅林風月集抄、玉塵抄、詩学大成抄において(10)「河ノミナカミ」や(11)「池モ潭モ」澄んでいる状態、(12)雨が降ったあとのさわやかで何もかも「塵モツカヌ」状態、(13)(14)「天（そら）」の晴れ晴れしく清らかな状態、(15)花も葉もすがすがしい状態、(16)「江山ノ浄イ」状態などである。

(10) 此河ノミナカミハ、イカニモセイ〳〵トスンテケツク深モナイソ。アサ〳〵トセイケツナト人カ云ソ。[中興禅林風月集抄5オ16] 莫信銀湾清且浅（中興禅林風月集巻一・顕万・乗槎図）

(11) ニワタツミト云ハ、アワノ如ナソ。ソレカヤメハ、池モ潭モセイ〳〵トスンテ波モナイソ。[玉塵抄巻四十一(8-559ペ)] 韻府群玉巻之十一「寥　楚辞」／寂寥兮収潦而水清

(12) 江上ニハ蘆花ガアル者ソ。秋ハ蘆花ガ白テ雪ノ如ソ。洲＿白蘆－花吐ト三体詩ニ作タソ。雨ノ一フリフツタ後ハセイ〳〵トシタ(12-1)景ソ。悟ノ境界ソ。月白風清キ体ソ。（略）雨ノ後ハ一切アライタテヽセイ〳〵ト(12-2)塵モツカヌ体ソ。[中興禅林風月集抄33ウ4] 最愛芦花経雨後（中興禅林風月集・巻一・紹嵩・秋暮江上）

(13) 至酒店便独酣暢家无儋石晏如也（略）晏如ハ晏ハクルヽトヨムソ。歳晏ト云ハ年晩ノコトソ。天ニ雲ノナウテハレキツテ清々トシテキヨイヲ云タソ。[玉塵抄巻三十八(8-137ペ)]

(14) 飛談卷霧ハ、晋ノ世ノ韓康伯ハ雑談カスクレタソ。コトバカ、飛ヒカケルヤウナソ。打ヲヽタ霧ヲ、マキノケテ、天ノセイ〳〵トハレ〳〵トシタヤウナソ。[詩学大成抄一11ウ]

(15) 菱ノ葉モ、荷ノ花モ、セイ〳〵トシテノゴイキツタ如ナソ。[同・七52オ] 菱荷浄如拭

(16) 初為江山靜　終防市井喧　上句、江山靜ノ字エ心エヌソ。靜ト云コトコソ園ニエ心エヌソ。浄ト云々、靜ノ字ヲカイタソ。コヽモ江山ノ浄イ如ニ、ソノ清々トキヨイト云心カ、シレヌ句ナリ。[同・七14ウ]

2　中国文献における《清々》およびセイセイトとの相違

次に、中国文献の《清々》のもつ意味を確認し、セイセイトとの相違について調べてみよう。

2-1 中国文献における《清々》

本稿で調査できた資料[8]から、文選1例、晏子春秋1例、晋詩1例、と唐詩4例の7例を得た。それほど多用されていなかったようである。以下に示すように、(17)(18)(19)風がさわやかですがすがしい状態、(20)「水」・(21)「江潭」・(22)「渓」が清らかですみきった状態、(23)「山冷氣清々」のように山中の空気や気流のすがすがしい状態などを表す。

(17) 清々泠々(割注:清々泠々清凉之貌也)　愈病析酲　發明耳目　寧體便人　此所謂大王之雄風也 [文選・巻十三・宋玉・風賦]（藝文印書館〈李善注〉）

(18) 淒々清々松上風　咽々幽々隴頭水［韋莊・贈峨嵋山彈琴李處士］(中華書局『全唐詩』巻七百)
(19) 洞陰泠々　風佩清々［晋・葛洪・洗藥池詩］(同・『先秦漢魏晉南北朝詩（中）』)
(20) 水乎清々　其濁無不雩途　其清無不灑除　是以長久也［晏子春秋内篇問下第四・景公問廉政而長久晏子對以其行水也（第四）］(商務印書館『四部叢刊（71）』)
(21) 清々江潭樹　日夕増所思［談戴・句］(中華書局『全唐詩』巻百十四)
(22) 不意入前溪　愛溪從錯落　清々鑑不足　非是深難度［皎然・渡前溪］(同・巻八百十八)
(23) 寒山夜月明　山冷氣清々　淒兮歸鳳集　吹之作琴聲［劉希夷・孤松篇］(同・巻八十二)

辞書類においても、以上の7例以外は掲載していない。『漢語大詞典』(巻五 1317 ペ) を見ると[9]、以下のように、「清々」の見出しで、語義の① (本稿でいう「物のさま」におさめられる) 以外、②③④はいずれも明・清の白話文の例だけとなっている。また、「清々冷々」の見出しでは文選(17)のみである (辞書を引用する際に、字体・括弧の記し方などを適宜あらためた。〔　〕中は劉試訳、〈　〉中は劉補注)。

清々　①清潔明澈貌〔清らかでいさぎよく、澄みきったさま〕:『晏子春秋』(例 (20))、『学徒』詩・劉半農〈現代詩人〉(以下は用例略)　②猶言白々地〔なおむだに、むざむざとも言う〕:『西遊記』〈明・呉承恩作〉　③清越〔声がすんで調子が高い〕:『古今小説』〈明・馮夢龍作〉　④清楚〔明白な、はっきりした〕:『二刻拍案驚奇』〈明・凌濛初編〉

清々冷々　清凉貌〔清らかに凉しいさま〕(文選 (17))

2-2　中国文献の《清々》・抄物のセイセイトに見られる意味上の相違

確かに、用例の見出される資料のうち、文選[10]はもちろんのこと、晏子春秋及び劉希夷集その書物自体も、遅くとも平安中期までに日本に伝来してきたと推定されるから (空海著『性霊集』巻四に「書劉希夷集獻納表」の節があり、寛平年間の 889 ～ 98 年藤原佐世撰『日本國見在書目録』「廿四儒家」に「晏子春秋七　冷然院」が見える)、中国文献の《清々》が漢語として受け入れられる可能性[11]がないとは言えない。また、以上の諸例中、(20)(21)(22)川の流れや(23)空気や気流を表す《清々》は、「物のさま」の意味で使われるセイセイトに共通するように見える。劉希夷の詩(23)と詩学大成抄(5-1)、晏子春秋(20)・唐詩(21)・(22)と中興禅林風月集抄(10)・玉塵抄(11)など比較してみると、それぞれ同趣の表現と見えないこともない (ただし、(5-1)(10)(11)はいずれも 3 節に述べるタイプ a「「清」字に対応」の場合であることを注意されたい)。

しかし、問題は《清々》が「心のさま」の意味と解釈できそうな例を見出せない一方で、1 節において確認してきたとおりセイセイトは「心のさま」の意味をも有することである。かりに「物のさま」から「心のさま」の意味が派生したとしても[12]、抄物に現れはじめる時点ですでに「心のさま」の意味をもち、しかも原漢文の語句について説明・解釈するための注釈語として使われているということはやや不審である (「注釈語」については劉〈2001〉を参照されたい)。セイセイトは中国文献の《清々》が漢語として受け入れられたものとする捉え方では、なぜ「心のさま」の意味をもつのかについて、十分な

説明ができないのである。

これだけでなく、「物のさま」の場合でも、抄物のセイセイトと中国文献の《清々》は清ラカサ・爽ヤカサ・スガスガシサという点においては共通するが、ただ《清々》には涼シサ・冷タサという要素を伴っていることに気がつく。これは(17)「清凉之貌也」とある李善注によって示唆される（この注は「清々冷々」を一語と見てつけたものか、「清々」と「冷々」の二語と見てつけたものかは不明だが、いずれにせよ「清」だけでなく「涼」という要素も含まれているのは間違いない)。また、(19)「洞陰冷々　風珮清々」では「冷々」は「清々」と対になっており、(22)「寒山夜月明　山冷氣清々」では「寒」字や「冷」字は現れているといった例からも、上記のことは容易に読みとれよう。

これに対して、抄物のセイセイトは清ラカサ・爽ヤカサ・スガスガシサそのものに焦点が置かれている。これは文脈中にセイセイトと共起する語によって判断できる。例えば、前掲(5)「世界モ一夜ノアイタニ、天地ノ気モ濁リ、水モユリシツムレバ、スミキル物也……」では「濁リ」「スミキル」と共起して、濁ることなく澄みきった清ラカサ・爽ヤカサ・スガスガシサを強調している。用例ごとの分析は省くが、次の表2に示すとおり、セイセイトと共起する語はスム・キヨシ・スミキル・ハレ／トシタ・ハレキル（以上はセイセイトの類義語と思われる)、濁ル・モウ／トシタ（以上はセイセイトの反義語と思われる）といった類と見られる。

【表2】共起語及びそれを用いる例

共起語	キヨシ（清・浄）	スム	スミキル 濁ル	スム ニゴリ乱	ハレキル	ハレ／ トシテ	モウ／ トシテ
用例	(7)(12)(13)(16)	(10)(11)	(5-1)	(5-2)	(13)	(14)	(8)

以上の論述で、抄物におけるセイセイト（1節）は中国文献の《清々》に存在しない意味をももち、しかも「物のさま」を表す場合においても意味が異なることを明らかにしてきた（2節)。これらのことから、セイセイトは漢語出自である可能性を認められない[13]。

それより、抄物はある原典への注釈としてつくられたという特殊性から考えてみよう。抄物の言語は広義では「すべて原漢文の言葉から触発されている」(寿岳〈1951〉130ページ）との指摘のとおり、抄文中に使われる語は何らかの形で原漢文の語句と関わっているわけである。したがって、原漢文の語句との関わり方を明らかにすることによって、抄文中の語は原漢文のどのような「言葉に触発されて」使われだしたか、いわばその語の発生の経路が明らかにされる場合があると考えている。次節に述べるように、セイセイトについて、原漢文にある《清々》を写したようなものが存在しない一方で、原漢文の「清」字に対応しているということが重要視される。

3　セイセイトの発生：X字（原漢文）⇒XXト・ニ（抄文）という表現法による創作

原漢文の語句との関わり方、すなわち抄文中に使われる語（ここではセイセイト）が

原漢文の語句とどう関わっているかについては、劉（2001）において詳述したとおりである。セイセイトに見られる原漢文との関わり方として、次の表3に示すようにa・b・cの三タイプがある（すべて劉〈2001〉でいうⅣに含まれる）。なお、セイセイトの原漢文は、多くの場合に該当抄物の原典に存在しており、例えば(6)にあたる原漢文は原典『集千家註批点杜工部詩集』にある詩句「高枕形神清」と見られる。たまに(7)のように、原漢文は原典『韻府群玉』にあるのではなく、抄者が自ら引用した山谷の詩にある「胸中洒落人品甚高」と見られるような場合もある。

【表3】原漢文の語句との関わり方（※「心のさま」の例に〰線を引いた）

a「清」字に対応　5	杜詩続翠抄(6) 中興禅林風月集抄(10) 詩学大成抄(5-1)(5-2)(11)
b「浄」字に対応　2	詩学大成抄(15)(16)
c　総合の文意に対応　6	中興禅林風月集抄(12-1)(12-2) 玉塵抄(7)(8)(13) 詩学大成抄(14)

前掲の用例を参照されたいが、a「「清」字に対応」は、(10)のように原漢文「莫信銀湾清且浅」にある「清」字の説明に用いられる場合（計5例）であり、b「「浄」字に対応」[14]は、(15)のように原漢文「菱荷浄如拭」にある「浄」字の説明に用いられる場合（計2例）である[15]。c「総合の文意に対応」は、a・bのように原漢文にある語句の一つにむすびつくのではなく、(12)のように原漢文である「芦花経雨後」(原典にある)・「洲白蘆花吐」(抄者が自ら引用した書物にある）に見える「雨後」「洲白」「蘆花吐」など複数の語句を通じてくみとった総合の文意に対応して、「セイセイトシタ景」によって説明するといったような場合（計6例）である。

ここで注目されるのはタイプaである。aは、原漢文に「清」とあるところを＜清々ト＞(6)・＜セイセイト＞(10)のように抄文に写すもので、それらの中に「心のさま」を表す例と「物のさま」を表す例がともに含まれているわけである（表3参照）。このことを重要視すれば、セイセイトの発生について次のように解釈できないか。

すなわち、原漢文の「清」字⇒セイセイ（清々）トという創作過程を想定する。つまり原漢文のX字＝「清」字を、畳語型XX＝「清々」にして字音読みにすることによって、セイセイトがつくりだされたという可能性である。これこそ、例えば原漢文にある「高枕形神清」(6)の説明にあたって、抄者が「清」字に注目して「心形清々トナル」のように説明することによって、自ずとセイセイトに「心のさま」の意味を生じさせた。同様に、原漢文にある「莫信銀湾清且浅」(10)の説明にあたって、抄者が「清」字に注目して「セイセイトスンテ」のように説明することによって、自ずとセイセイトに「物のさま」の意味を生じさせた。

2-2の冒頭に、(5-1)(10)(11)の3例については中国文献の《清々》とそれぞれ同趣と見られると述べたが、表3に示したとおりに3例はすべてタイプaであることが明らかな以上、このような「同趣」は必然性を欠くと言わねばならない。つまり、それらは中国文献の《清々》に基づくのではなく、あくまでも抄物において原漢文の「清」字⇒セイセイ（清々）トという表現法によるものなのである。

このように解釈すれば、先ほど問題だったセイセイトは中国文献の《清々》にない「心のさま」の意味をもつこと、「物のさま」から「心のさま」の意味が派生したとは考えにくいこと、《清々》と異なる意味をもつことなど、自ずと明らかになるのではないか。それは、セイセイトは中国文献の《清々》とは関連づけられず、漢語に出自するものではないからである。

そもそも、「X字（原漢文）⇒XXト・ニ（抄文）」つまり原漢文のX字をXXト・ニ畳語型にして抄文に組み込むという表現法は、抄者にとって普通に用いられている表現法のようである。ほかにこの表現法による情態副詞の例として、出雲(1982)[16]（540ペ「原漢文によった」AABBト型漢語情態副詞）、柳田（1975）（283ペ「原典の語が字音読みされているか、またはされると見られるものを、その字を含んだ二文字の字音語で説明する例」）、山内（1987）（148～50ペ「甲甲ト・ニ」の二字畳語漢語）などに言及しているところを参照すれば、玉塵抄(24)～(27)、詩学大成抄(28)、毛詩抄(29)～(31)に挙げるように、「淙ーソウ〳〵ト」「凛ー凛々ト」などをひろうことができる。また、筆者の調査では漢書列傳竺桃抄に(32)～(34)が見られる[17]。

(24) 淙水声ナリ、ソウ〳〵ト流テ、ナルヲトナリ［玉塵抄巻五(1-524ペ)］

(25) 出門愁浩渺（略）トコモベウ〳〵浩々ト水ノハテモナイソ［同・巻十四(3-571ペ)］

(26) 混-沌ハ、（略）コン〳〵トン〳〵トシテナニトモイワレヌ心ソ［同・巻十六(4-44ペ)］

(27) 磌　石落声（略）石ノ天カヲチ声カ、磌々トアツテキコエタソ［同・巻三十七(8-7ペ)］

(28) 竊独悲此凛秋（略）此ノ秋ノ凛々トシテ物スゴイナ秋ヲカナシムナリ［詩学大成抄八8オ］

(29) 民漸開悟〔疏〕（周南・關雎）　民カ漸々ニ悟テナラウソ［毛詩抄一6ウ］

(30) 今其師病而微矣〔疏〕（小雅・苕之華）　諸侯カヲトロヘテ、師カヒヽニナツテ［同・十五29ウ］

(31) 懿公為狄人所滅國人分散（鄘風・載馳）　懿公ハ夷ニ殺サレテ、散々ニ成ツタソ［同・三20オ］

(32) 輕打之――輕々ト擊ソ［漢書列傳竺桃抄12オ4］

(33) 口倦乎叱咤――口テハ叱々ト云［同・73ウ6］

(34) 匈奴北邊蕭然苦兵――蕭然ハ蕭々ノ心テハナイテ［同・65ウ11］

なお、ここで断っておきたいのは、この表現法によるXXト・ニの語はすべて抄物における「創作」だとはいうことができない。むしろ、その中に抄物を通じて受容されてきたまたはそれ以前に受容されてきた、漢語出自のものが多い。上記諸例のうち、(31)散々ニ・(32)軽々ト以外はその可能性が大きい[18]。「創作」と言えるのは、セイセイトのように抄物になってはじめて現れており、しかも中国文献のそれとは異なる意味をもつと確かめられるものといった場合に限られる。

むすび

本稿の主旨は次のようにまとめられる。すなわち、セイセイトは「X字（原漢文）⇒ＸＸト・ニ（抄文）」（原漢文のX字をＸＸト・ニ畳語型にして抄文に組み込む）という抄物独自の表現法により、原漢文の「清」字を畳語型にしてさらに字音読みにしてつくりだされた可能性を指摘できる。中国文献の《清々》とは意味上大きく相違すると確かめられたため、漢語出自である可能性を認めることはできない。

抄物において、この表現法による情態副詞の使用は多い。中には注釈という文体の中にとりいれるための形として臨時的に使われたものもあろうが、現在にまで受け継がれたものもある。それらの中に、セイセイトのように、その字づらが中国文献に確認できるにしても、それらが果たして漢語出自かどうかを慎重に考えるべきであろう。なお、「火事（クワジ）（火の事）」や「返事（ヘンジ）（かへりごと）」など典型的な和製漢語の類（すなわち山田〈1958〉478ぺにいう「もと國語に宛てたる漢字を後に音にて讀み漢語のさまになれりし語」）とは素性が違うが、原漢文の「清」字を畳語型にした「清々」を字音で読むという方向では、セイセイトは一種の和製漢語とも言えよう。和製漢語の通例として、記録体の文章がその発生の場所とされてきたが（佐藤〈1983〉、注1「漢語」の項を参照）、抄物は和製漢語が発生するもう一つの宝庫であるように思われる。

なお、セイセイトは抄物というやや特殊な資料に発生し、しかも当時広く使われていたわけでもないらしい（前掲表1に見るとおり、全13例中杜詩続翠抄に1例ある以外はすべて惟高妙安の手になる抄〈中興禅林風月集抄・玉塵抄・詩学大成抄〉に現れている。cf. 杜詩抄・五家正宗賛抄を含めても四人の抄者にすぎない）。それにもかかわらず、なぜ後世に広まり現代語にまで受け継がれてくることができたのだろうか。セイセイトの語史をたどってみる必要があろうが、筆者は、漢語情態副詞を全体から眺めて考えたい。つまり、その背景に、日本語のシステムの中において、漢語情態副詞の型の一つとしてＸＸト・ニの畳語型が語形の安定性をもち[19]、定着している[20]からだという大きな理由があると考えられないだろうか。セイセイトを含め、冒頭に挙げた「悠々（ト）」や「濛々・朦々（ト）」はすべてこの型にあたる。また一方、その「語形の安定性」の支えとして、ただそもそも中国文献におけるＸＸ型の情態形容の語がそのまま多く受容されてきたというだけの理由ではなく、和語の情態副詞（特に擬音語・擬態語）において、元来「二音節反復」（カラカラなど）のＡＢＡＢ型が歴史的に多用され[21]、その代表的な型の一つとして安定性をもつということをも合わせ考えるべきかと思う。というのも、セイセイトなどのＸＸト・ニ畳語型の漢語情態副詞はまさにこの「二音節反復」の形にあてはめられるわけである。

注

1）本稿でいう「漢語出自」や「漢語に出自するもの」とは狭い意味での「漢語」、すなわち「本来中国において漢籍・仏典などに用いられた字音語のことで、歴史的にわが国に流入した」（佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院 1983年第5版、佐藤武義氏執筆「漢語」の項283ぺ）といわれるもの

を指す。いわゆる「和製漢語」すなわち「形は漢語と同じく漢字を用ゐてそれを音讀するものなれども、それは本来の漢語にあらずして本邦にてつくれるもの」(山田〈1958〉477～78ペ)といった類は含まない。

2) 現代語については『CD-ROM 版新潮文庫の百冊』(新潮社 1995) 所収の昭和期生まれ 24 名の作家の作品(27 点)を資料とした。本文に挙げた(2)(3)を含め計 4 例検出したが((3)以外は仮名書き)、すべて「心のさま」の意味と見られる。なお、この意味の場合に、厳密に外界の事物の状態によって喚起されるような例が含まれる。例えば、(3)では「手紙の件」の解決と「応募書類」の郵送済みといった外界の状況の変化によって、気分がさっぱりしてきたと見ることができる。同様に、後掲(5-2)では「ハイヲキニハセイセイトアル」という気分になれたのは、早朝のすがすがしくてさわやかな状態によると解釈できるわけである。

3) (4)杜詩鈔は『時代別国語大辞典(室町篇)』による。本抄は雪嶺永瑾(～1537)の抄。

4) 意味変化の過程については概ね次のようである。抄物に連続する狂言資料において、「心のさま」は 4 例(磁石〈虎明本・天理本・続狂言記など〉、土筆〈保教本・虎寛本〉、法師が母〈虎寛本・虎光本〉、武悪〈同前〉の四曲に見える)と「物のさま」は 2 例(抜殻〈虎光本〉・お冷〈三百番集本〉の二曲に見える)ある。抄物とは違って「心のさま」のほうがやや多く見られることから、おそらく中世末から近世にかけて「物のさま」から「心のさま」へ意味変化が生じていたろうと考える。明治期・大正期では「心のさま」のほうが圧倒的に多くなる。この傾向が昭和期以降も受け継がれて、やがて「心のさま」の意味だけが現代語に定着するようになる。このように、抄物はセイセイトの発生期で、その意味変化は中世末から近世にかけて生じ、近代を通して決定的な時期(「心のさま」の意味で発達する時期)を迎えたと言える。一方、意味の変化とともに、～トシテ・トの副詞用法から～スルのサ変動詞用法へと変化してきたと見られる。

5) 当辞書の「例言」においては「漢語」について説明していない。「漢語」の見出しに「かん・ご　名(漢語)スベテ、支那カラ傳来ノ語。支那字ヲ音讀ニシタモノヲ普通ニ通用シテイフ。」とある。

6) 当辞書では、漢字表記に<清々>と<晴々>の二とおりを掲出している。ただ、<晴々>については中国文献において確認できないので、本稿ではこれについて議論しない。なお、近世中後期の狂言台本に見える<晴々>(「心カ晴々(ハレ〳〵)ト(セイ〳〵)致イテ〈土筆・保教本二 494 ペ〉」「氣が晴せいとする〈じしやく・虎寛本下 218 ペ〉」など)、近代語資料に見える<霽々><爽々>(「心地が霽々して来たです〈岩波書店刊紅葉全集第六巻・多情多恨〉」「實に爽々(せい〳〵)するよ〈日本図書センター刊復刻徳冨蘆花集第三巻・不如帰〉」など)といったような漢字表記例は、いわゆるあて字と考えておく。

7) (9)五家正宗賛抄は南化玄興(～1605)の講。

8) 中国文献における《清々》について主に以下の資料を調査した。史記・漢書(香港中文大学崇基書院遠東学術研究所二十四史索引)/毛詩・楚辞・諸子(「老子」など 14 部)(香港中文大學中國文化研究所先秦両漢古籍逐字索引叢刊)/小尾郊一他『玉臺新詠索引』/斯波六郎『文選索引』/平岡武夫他『白氏文集歌詩索引』/松浦崇『全晋詩索引』/京都禅文化研究所『唐詩選三體詩総合索引』/現代出版社・社会科学文献出版社・天津古籍出版社『全唐詩索引』/宋詞:仇永明他『東坡詞索引』・林淑華『辛弃疾全詞索引及校勘』

9) ほかに、『佩文韻府』(台灣商務印書館印行)「清々」(巻二十三下・八庚)及び「冷々」(巻二十四下・九青)の項目にも(17)が見える。『大漢和辭典』(巻七 69 ペ)では「清々」の見出しに「清らかなさま。清々冷々を見よ」とあって、「清々冷々」の見出しにも同じく(17)を挙げている。

10) ただし、文選(17)「清々冷々」については、辞書類では「清々冷々」の見出しにおさめており、「清々」と「冷々」の二語でなく一語として扱っているようである。これを《清々》の例としては不適切ではないかという疑念があるが、ここであえて挙げることにしたのは、日本語に伝わる場合には「清々」と「冷々」の二語として認識される可能性を簡単に否定できないと考えたからである。(18)についても同様に考えた。

11) なお、漢籍の伝来とある個別語の受容とは同一次元の問題ではないので、書物そのものが日本に伝

わってきたことは、その中の語がすべて日本語に受容されたということの直接の証拠にはなりかねない。

12) 管見の限り、「物のさま」を表す例は中興禅林風月集抄（1560年成立）以降のようで、「心のさま」のほうは(6)杜詩続翠抄（1441）など成立のはやい抄物にすでに見られる。ただし、「心のさま」から「物のさま」が派生したと想定するのはやや無理のようである。

13) (16)「清々トキヨイ」のように文選読らしい例（(10)(11)(14)も同じ）の存在から、セイセイトは漢語出自ではないかとも思わせるが、事実、これらの抄文のうしろの原漢文には「清々」という文字列が存在しない（原漢文の語句との関わり方〈3節〉を参照）。このような例は、寿岳（1953）は、「抄の部分に於て抄者自身の語として誕生しているのであって（略）一見「文選読」めいた表現法をとっている」、「所謂重言形式（同義類義語を重ねた表現形式――劉補注）に関係してくるもの」（34ペ）であり、文選読ではないと指摘した。つまり、例えば(16)は「初為江山靜」という詩句の抄文中に生じたもので、実際「清々」を漢語（出自）として意識しているのではなくて、単に同義類義的意味をもつ「清々ト」・「キヨイ」の二語を重ねて丁寧に解釈しているためであろう（これを柳田〈1975〉は「反復への指向」によるものという〈296～97ペ〉）。これは、(7)「胸中キヨウ　セイ〳〵トシタソ」、(13)「ハレキツテ清々トシテ　キヨイ」のような文選読でない、セイセイトとキヨシとが重ねられている例を見れば理解できよう。

14) (16)もbに分類した。原漢文である「初為江山靜」について、抄者が「江山靜ノ字エ心エヌソ。靜ト云コトコソ園ニエ心エヌソ。淨ト云々、靜ノ字ヲカイタソ」と抄しているように、「靜」字が誤りだと考えているようである。したがって、「清々トキヨイ」は結局「淨」字の説明に使われていると判断できる。

15) a・bは対応する原漢文の語句が一つだけの場合で（a「清」・b「淨」）、複数あるcの場合とを区別するだけの分け方であって、必ずしも「清」字・「淨」字が抄文中において完全にセイセイトによって置き換えられなければならぬという役割を要しない。したがって、(15)においては原漢文の「淨」字＝セイセイトシテつまり「一対一」の対応（(5-1)(5-2)(6)(16)も同じ）というように、完全に語置換と見られる場合もあれば、(10)においては原漢文の「清」字＝セイセイト＋スンテつまり「清」字を「セイセイト」と「スンテ」の二語で説明しているという「一対多」の場合（(11)も同じ）もある。

16) 同著によれば、巻十一以降「セイ〳〵トシテ」は4例あるが、次の例（タイプa）以外は所在不明。
　酒渇愛江清　江水ノスンデセイ〳〵トシタヲ（略）［玉塵抄巻三十一(6-826ペ)］

17) ただ、抄物は原典のジャンル（韻文系・散文系に大別する）から見る場合、散文系抄物より（筆者が調査した漢書列傳竺桃抄）、韻文系抄物のほうにおいては（上記諸論考のうち玉塵抄は韻書、詩学大成抄は詩法・詩作指南書、毛詩抄は詩書）、この表現法による例が多い印象である。

18) 「軽々ト」は中古の記録体の文章においてつくられた和製漢語であり（注1佐藤武義氏執筆「漢語」の項を参照）、「散々ニ」は「ちりぢりに」から来た和製漢語である（山内〈1987〉149ペ）と指摘された。なお、「漸々ニ」は、山田（〈1958〉409ペ）に「漸々（法華経）　詩経ニイフ「漸々」ハ今ノ俗語ニアラズ」とあるように、漢籍でなく仏典に出自するとされている。

19) 「語形の安定性」について、山内（1987）では「「甲甲ト」の形は語形の安定性があり、いくつかの語は中世において既に口語史上に位置を占めたと言える」（153ペ）と言及している。また、通時的にＸＸト・ニ型が多用されていることは山田（1958）によって把握することができる（漢語情態副詞の九形態のうちに「畳字（ト・タリ）」類に「悠々」、「濛々」など100語ほど掲載〈254ペ〉）。

20) 前田（1983）に掲げた一覧表（中古～近代）からＸＸト・ニ型の語を抽出してみると、中世においてその語例が最も多い。この結果によれば、中世にはいってこの型が定着するようになったと推測される。なお、当著では抄物の例を加えていない。その点ではＸＸト・ニ型はまだまだ増える可能性がある。

21) 「二音節反復」の歴史的分布について、鈴木(1973)に明らかにされたように、上古20語未満だが、中古30語、中世の前期50語・後期100語、近世300語、現代400語とあるように増えつつある。

参考文献（本稿で引用したもののみ）

出雲　朝子（1982）「第十章 玉塵抄の副詞―その語彙の性格―」『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』桜楓社

佐藤　宣男（1983）「へんじ（返事・返辞）」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙・第11巻語誌Ⅲ』明治書院

寿岳　章子（1951）「言語観察の対象としての抄物の一意義―擬声語と翻訳―」『国語国文』第20巻4号。後『室町時代語の表現』（清文堂1983）に再録

寿岳　章子（1953）「抄物の文選読」『国語国文』第22巻10号。同上

鈴木　雅子（1973）「擬声語・擬態語一覧」『品詞別日本文法講座』（巻10「資料1」）明治書院

前田　富祺（1983）「漢語副詞の変遷」『国語語彙史の研究　四』和泉書院

柳田　征司（1975）「第三章 言語の性格　五　語彙」『詩学大成抄の国語学的研究（研究篇）』清文堂

山内洋一郎（1987）「中世漢語の一面―毛詩抄の「然」をめぐって―」『国語語彙史の研究　八』和泉書院

山田　孝雄（1958）『國語の中に於ける漢語の研究（訂正版）』寶文館

劉　　玲（2000）「モウモウ（ト）の漢字・仮名表記とその背景―漢語らしさと和語らしさをめぐって―」『都大論究』37

劉　　玲（2001）「漢語情態副詞「悠々ト」の受容の一面―室町期抄物における原漢文－抄本文の対応関係を通して―」国語学会二〇〇一年度秋季大会要旨集

【資料1】抄物：テキストは以下のとおり（底本・講抄者・抄物の種類などについては紙幅の都合上割愛する）。用例調査の際、索引類を使った4抄（*印をつけた）以外は筆者の全文調査による。用例を確認できた抄物について、〈　〉内に原典テキストを記す。なお、用例引用の際に適宜句読点をつけ、漢字及び古体・変体・略体の仮名や合字などは通行の字体に改め、返り点・付訓などは対象語以外全部省く。論語聞書：『近代語研究（第三集）』収録『論語聞書全』／*論語私抄：坂詰力治編著『論語抄の国語学的研究』（武蔵野書院）「影印篇」「索引篇」／長恨歌抄：岡見正雄博士還暦記念刊行会編『室町ごころ―中世文学資料集―』（角川書店）所収『長恨歌並琵琶行抄』／*史記桃源抄：清文堂『抄物資料集成』、柳田征司編「索引」は同著所収／*毛詩抄：同前、山内洋一郎編「索引」は同著所収／中興禅林風月集抄：清文堂『新抄物資料集成』〈原典は同テキスト所収〉／詩学大成抄：柳田征司編『詩学大成抄の国語学的研究（影印篇）』清文堂〈原典は同テキスト所収〉／以下4抄は勉誠社『抄物大系』：蒙求抄　三体詩幻雲抄　三体詩素隠抄　玉塵抄（巻一～十、巻三十八～四十二）〈近思文庫古辞書研究会編『古辞書抄物：韻府群玉・玉塵抄（原典篇）』大空社〉／以下4抄は清文堂『続抄物資料集成』：荘子抄　杜詩続翠抄〈天理図書館善本叢書『集千家註批点杜工部詩集』八木書店〉　漢書列傳竺桃抄　*山谷抄（山内洋一郎編「索引」は同著所収）

【資料2】抄物以外：*印を付けたものは筆者の全文調査による。それ以外は次に掲げる総索引類を使用したが、紙幅の都合上著者・出版社名など割愛する。漢文14点：*『寧楽遺文』（獻物帳・寫経所公文・諸国田券のみ）『古事記総索引』『日本書紀総索引』『風土記の研究並びに漢字索引』『懐風藻漢字索引』『凌雲集索引』『文華秀麗集索引』『日本霊異記漢字総索引』『性霊集一字索引』『菅家文草 菅家後集詩句総索引』『本朝文粋の研究（漢字索引篇・校本篇）』『和漢朗詠集漢字索引』*『楊守敬旧蔵本将門記』*『真福寺蔵本将門記』／和文22点：『古典対照語い表』（万葉集 竹取物語 伊勢物語 枕草子 源氏物語 紫式部日記 土左日記 かげろふ日記 更級日記 大鏡）『和泉式部日記総索引』『大和物語語彙索引』『宇津保物語本文と索引』『篁物語校本及び総索引』『とりかへばや物語総索引』『古活字本狭衣物語総索引』『落窪物語総索引』『夜の寝覚総索引』『濱松中納言物語総索引』『堤中納言物語総索引』『栄花物語本文と索引』／和漢混淆文15点：『今昔物語集自立語索引』『打聞集：総索引付』『宇治拾遺物語総索引』『古本説話集総索引』『十訓抄本文と索引』『保元物語総索引』『平治物語総索引』『延慶本平家物語』『平家物語総索引』『土井本太平記本文及び語彙索引』『義経記文節索引』『広本・略本方丈記総索引』『徒然草総索引』『海道記語彙及び漢字索引』『東関紀行本文及び総索引』／キリシタン3点：『天草本金句集本文及び索引』『天

草版平家物語対照本文及び総索引』『文禄二年耶蘇會板伊曾保物語（本文・飜字・解題・索引）』／狂言３点：『天正狂言本 本文・総索引・研究』『大蔵虎明本狂言集総索引』『狂言記の研究（翻字篇・索引篇）』／その他：『御伽草子総索引』*『謡曲集』

【資料３】古辞書：編著者を記さない場合は中田祝夫編「古辞書大系」に収められたもの。『色葉字類抄研究並びに総合索引』／築島裕解説『図書寮本類聚名義抄』勉誠社／正宗敦夫編纂校訂『類聚名義抄（観智院本）』風間書房／『字鏡鈔（天文本）』／『字鏡集白河本寛元本研究並びに総合索引』／『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』／北野克写『名語記（金沢文庫本）』勉誠社／『文明本節用集研究並びに索引』／『中世古辞書四種研究並びに総合索引』：頓要集・撮壌集・温故知新書・運歩色葉集（静嘉堂本）／京都大学文学部国語学国文学研究室編『元亀二年京大本運歩色葉集』／『古本節用集六種研究並びに総合索引』：伊京集・明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・易林本・黒本本／『古本下学集七種研究並びに総合索引』／『合類節用集研究並びに索引』／『書言字考節用集研究並びに索引』／小島幸枝編『耶蘇会板落葉集』笠間索引叢刊 55

（リュウ　レイ　筑波大学大学院博士課程　文芸・言語研究科　日本語学）